



[今月の聖書]

「十字架の言は、滅び行く者には愚かであるが、救にあずかるわたしたちには、神の力である。」(I コリント 1:18)

「ユダヤ人はしるしを請い、ギリシヤ人は知恵を求める。しかしわたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝える。このキリストは、ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなものであるが、召された者自身にとっては、ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神の力、神の知恵たるキリストなのである。神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからである。」(I コリント 1:22-25)

「しかし、わたし自身には、わたしたちの主イエス・キリストの十字架以外に、誇とするものは、断じてあってはならない。この十字架につけられて、この世はわたしに対して死に、わたしもこの世に対して死んでしまったのである。」(ガラテヤ 6:14)

「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。」(ヨハネ 3:16)

「キリストは罪を犯さず、その口には偽りがなかった。ののしられても、ののしりかえさず、苦しめられても、おびやかすことをせず、正しいさばきをするかたに、いっさいをゆだねておられた。さらに、わたしたちが罪に死に、義に生きるために、十字架にかかって、わたしたちの罪をご自分の身に負われた。その傷によって、あなたがたは、いやされたのである。」(I ペテロ 2:22-24)

「しかし事実、キリストは眠っている者の初穂として、死人の中からよみがえったのである。それは、死がひとりの人によってきたのだから、死人の復活もまた、ひとりの人によってこなければならぬ。アダムにあってすべての人が死んでいるのと同じように、キリストにあってすべての人が生かされるのである。」(I コリント 15:20-22)

お元気でお過ごしでしょうか。今月は希望の言葉③「十字架の恵」と題して福音の中心テーマをお話したいと思えます。旧約聖書の重大テーマは、アブラハムがその子イサクを神に捧げたと言うことです。それは新約聖書において、神が御子イエスキリストを十字架につけて、私たちの身代わりとしてくださったと言うことにつながります。それは人間が持っている本質的罪の苦しみから、イエス・キリストの十字架によって救いがもたらされると言う福音を意味しています。アダムによって人間に入った罪が、イエスキリストの十字架によって永遠の命へと導かれると言う「福音」なのです。

“One for all, All for one.” (1人はみんなのために、みんなは1人のために) という言葉は、よく福祉で用いられたり、大学のモットーになったりしています。本来 1844 年に、アレクサンドル・デュマ・ペールによって作られた「三銃士」で述べられた言葉です。スイスの国会議事堂の天井ステンドグラスにも用いられています。それはまさに、イエス・キリストが全人類のために十字架に掛かれたことを意味しています。主の受難と復活を思いめぐらすシーズンに、神の恵みと祝福が豊かに与えられますようにお祈りいたします。

(お知らせ)

* 地区集会のご案内

4月9日(火) 13:00 CFI 横浜集会 (福音喫茶メリー TEL 045-231-6773)

4月16日(火) 13:00 CFI 千葉集会 (東天紅センシティタワー23F)

4月17日(水) 11:00 水曜礼拝、14:00 ジョイコーラス礼拝 (自由が丘チャペル)

* 4月11日(月) 19:00 東日本大震災復興支援超教派一致祈祷会 (淀橋教会)

* 4月18日(木) 11:00 バイブルアカデミー (自由が丘チャペル、受講料 3,000 円)

* 6月7日(金) 13:00 関西集会 (大阪聖パウロ教会)

「天国への戴冠式」

大野佳代子（東京都）

主人は 2016 年の夏、虎の門病院で癌の手術を受けました。手術後は、また多摩川での 1 万歩の散歩を楽しむ毎日でしたが、昨年春の PET 検査で、骨とリンパ節に転移が見られ、抗癌剤治療が始まりました。それから、色々と抗癌剤を変えてみましたが、癌の進行が進み、肝臓にも転移してゆきました。

今年 1 月、主治医の先生から『大野さん、もうこれ以上抗癌剤治療を続けるのは、かえって命を縮める事になると思うので、緩和治療に移行しませんか』とのお話があり、中々受け入れ難かったようですが、その時既に、身体の痛みが強く病院内の移動は車椅子となっておりましたので、その晩「希望のある緩和治療をしてゆこう」と、家族で話し合いました。以前、元気な頃の雑談の中で「最期の時まで家に居られたら、いいなあ～」と申しておりましたので、訪問医の先生と、訪問看護師の方々と連携を取り自宅での緩和治療を始める事となりました。



2019 年 2 月 18 日（月）、よく晴れた暖かな日でした。この日は看護師の方々が、10 時からベッドの上でシャンプーや髭剃り、身体全体を蒸したタオルで拭いて下さる日でした。その全てが終わろうとしている、10 時 15 分、主人は旅立ちました。亡くなる 4 日前の朝方、そっと様子を見に行くと、もはや動かない身体でございましたが、不思議な事についていつの間にかベッドに座っておりました。

喋る事も難しい状態の中で、私が「お祈りしましょうか？」と申しますと、主人はすぐに祈り始めました。試練の多い人生でしたが、祈りの中で『神様どうして・・・』と言う恨み言は、一言も聞く事はございませんでした。ただ『神様、楽しい人生をありがとうございました』と同じ言葉で 3 回続けて祈り『神様、もう少しだけ佳代子と過ごす時をお与え下さい』と祈り終えました。（主人は昨年 8 月、洗礼を受けさせて頂いております。）

主人の最後の祈りを思い浮かべる時又、ある方が『晃義さんを見送る式は、葬儀ではなく戴冠式。それは、神様から義の冠を戴いての天国への凱旋だ。』と、仰って下さった事を思う時、大きな寂しさはございますが悲しみは薄らぎます。

本当に本当にありがとうございました。主人は旅立ちましたが、これからも変わらぬご親交お導きを、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

2019 年 早春 感謝しつつ